

## Mahābhāṣya ad P1.3.1研究 (5)

小 川 英 世

### 1.4.1.1. [BHĀṢYA]

[問い] しかし、〈行為〉 (kriyā) とは何か。

### [PRADĪPA]

「しかし、[〈行為〉 (kriyā) とは] 何か」： [これは] 〈実体〉 (dravya) とは別個なものとして (dravyavyatirekeṇa) その [〈行為〉] が存在するということに [〈行為〉の不知覚性のために] 考えが及ばない者 (asambhāvayat) が発した質問である<sup>102)</sup>。

### ノート (12)

カイヤタは、この質問が [kriyāvacano dhātuḥ] という意味論的な定義規則に関して、どのような観点・背景からなされているのかを説明している。この意味論的な定義規則は、〈読み上げ〉依存による術語適用において指摘された難点—「dhātu」項目と同形の非「dhātu」項目に対する術語「dhātu」の過大適用を回避するための禁止規定の新設 (samānaśabdapraṭiśedha) ならびに音連鎖範囲の言及 (parimāṇagrahaṇa) の手続き—を回避するために提案された。意味を術語適用に関与させることによって音連鎖範囲限定の労がはぶかれることは述べた<sup>103)</sup>。しかしながら、「dhātu」項目と同形の非「dhātu」項目に対する術語「dhātu」の過大適用の回避のために、当該の意味論的定義規則が実効性を有するためには、「dhātu」項目と同形であっても、それが〈行為〉ならざるものを表示するものである場合には、それに対して術語「dhātu」は適用されないというように、意味のレベルで、〈行為〉と〈行為〉ならざるものの区

別 (arthavivecana) が確立されていなければならない。

カイヤタは、〈行為〉と〈行為〉ならざるものの区別を、〈行為〉と〈実体〉の対立のもとに捉える。もし〈行為〉と呼ばれるものと〈実体〉と呼ばれるものとの差異 (vyatireka) が前提されなければ、当該の定義規則は「dhātu」項目と同形の非「dhātu」項目に対する術語「dhātu」の過大適用を回避し得ない。この点をナーゲシャは次のように述べる。

「そしてこのような場合、当該のように [kriyāvacaṇo dhātuḥ] というように] 定義規則を定式化しても、〈実体〉を表示する項目が「dhātu」と呼ばれるということは排除されないから、同形語に対する [術語「dhātu」] の過大適用は改善されない。」<sup>104)</sup>

ところで、上述の意味論的な定義規則に関連して〈行為〉という意味について問うということは、その特定の意味を定義規則に導入することによって〈読み上げ〉依存にまつわる難点は解決されるのか、という意図をもって問うことである。この文脈で単に意味そのものを問うことは何等意義を有さない。したがって、この質問の意図するところは、文字通りの〈行為〉そのものに対する問いではなく、「〈行為〉と呼ばれるもの、それは〈実体〉とは異なるのではないではないか。なぜなら、〈実体〉と別個にそのようなものは知覚されないから」というものである。質問者は〈行為〉の不知覚性に基づいて〈行為〉の〈実体〉との差異を疑っているわけである。しかし、一般には〈正語〉の説明に従事する文法家にとって意味区分は所与のものである<sup>105)</sup>。

さらに、ここにおけるカイヤタの〈行為〉—〈実体〉の対立図式は、Nirukta I.1: bhāvapradhānam ākhyātaṃ sattvapradhānāni nāmāni による名詞形 (nāman) と動詞形 (ākhyāta) の定義のパタンジャリ的解釈を反映している。彼は、vt.2 ad P5.3.66に対するBhāṣyaにおいて、同定義中の〈bhāva〉を〈kriyā〉、〈sattva〉を〈dravya〉に置き換え、それぞれを定動詞接辞で終わる項目 (tīnanta) および名詞接辞で終わる項目 (subanta) の主要意味とみなしているのである<sup>106)</sup>。〈実体〉と〈行為〉相互の関りと対立点については次のように言われる。

「〈実体〉は〈行為〉と関係を結ぶ。[問] どのような関係を結ぶのか。[答] 〈実体〉は〈行為〉の実現に際して能成者 (sādhana) となる。」<sup>107)</sup>

「実に、実現されるものはまさに〈行為〉であって、〈実体〉ではない。〈実体〉は、[それを表示する言語の] 本性上既成態 (svabhāvasiddha) である。」<sup>108)</sup> パタンジャリによれば、〈行為〉と〈実体〉は、実現対象と能成者の関係 (sādhyaśādhana bhāvasambandha) に立ち、〈行為〉がその在り方が実現さるべきもの (sādhya rūpa) であるのに対して、〈実体〉はすでに実現された、既成態としての相 (siddha rūpa) を有するものとして対照をなす。〈実体〉が〈行為〉に対して実現関係に立つという場合、能成者としての〈実体〉はまさしく〈行為〉実現の能力を有するもの (kāra kaśaktimat) として kāra ka そのものである<sup>109)</sup>。カイヤタが〈行為〉に対立するものとして捉える〈実体〉とは、まさしくこのようなものである。

#### 1.4.1.2.1. [BHĀṢYA]

[答] [(行為)、それは] iha である。

[問] しかし iha とは何か。

[答] ceṣṭā である。

[問] しかし ceṣṭā とは何か。

[答] vyāpāra である。

#### [PRADĪPA]

「Iha である」：〈iha〉という語と〈ceṣṭā〉という語は、[文法学] 以外の [日常的な言語運用の] 場では、特殊な〈ハタラキ〉 (vyāpāra viśeṣa) を表示する。しかしこの [我々の文法学] では単に〈ハタラキ〉そのもの (vyāpāra mātra) を表示するものと理解すべきである。

誰かにとっては [(iha) 以下の複数の語のうちの] どれかの語によってかの [(行為) という] 事象は知られているものであるから、複数の同義語 (paryāya) が言及されている。

## ノート (13)

ナーゲーシャによれば、日常的には、〈iha〉という語は、心の〈ハタラキ〉 (mānasavyāpāra)、欲求 (icchā) を意味し、〈ceṣṭā〉という語は、身体的な活動 (kāyapariśpanda) を意味する。カイヤタが語るところでは、パーニニ文法学では、これら両語は、以上のような〈ハタラキ〉の特殊相ではなく〈ハタラキ〉それ自体としての相を指している。このようなものとしてそれらは同義語であるとみなされるのである<sup>110)</sup>。

## 1.4.1.2.2. [BHĀṢYA]

[反論] ひたすら (sarvathā) あなたはまさに言葉だけを用いて言葉を説明している (ācaṣṭe)<sup>111)</sup>。[あなたは] 何等かの事象それ自体 (arthajāta) を指差して、「この種のものが〈行為〉である」というように現示していない (na nidarśayati)。

## [PRADĪPA]

「ひたすら (sarvathā)」：〈実体〉と別個なものとして〈行為〉が存在することに對する認識根拠 (pramāṇa) が述べられない限り、同義語の言及だけによってはその〔〈行為〉〕の本質 (svarūpa) は決定されない、という意味である。

「事象それ自体 (arthajāta) を」：事象そのもの (arthasvarūpa) を、という意味である。

## ノート (14)

ここにおける反論は、ナーゲーシャによれば嘲笑 (upahāsa) を意図している。知覚によっては、〈行為〉が〈実体〉とは別個に存在することは認識されない。だから、「〈行為〉とは何か」という質問は、「知覚レベルで言えば、〈実体〉とは別個に〈行為〉は存在しないのではないか」という意図から発せられた。

このような質問に対しては、〈行為〉の〈実体〉からの差異そのものを明らかにする形で答えが与えられなければならない。しかし今与えられたのは同義語の提示である。これは、〈行為〉そのものを問われたならば妥当であるが、上述の意図からの質問に対する答えとしては、言わば的外れのそしりを免れず、この点が嘲笑を買う理由となっている<sup>112)</sup>。

カイヤタは、〈実体〉とは別個なものとして〈行為〉が存在するということに対する認識根拠が述べられない限り、〈行為〉の本質は、同義語を挙げるだけでは決定されない、と述べる。したがって、この場合の認識根拠とは知覚以外の認識根拠であり、それが示されることによって確立さるべき「〈行為〉の本質」とは、言うまでもなく〈行為〉の〈実体〉との差異 (dravyavyatireka) であることになる<sup>113)</sup>。

実際問題として〈行為〉は〈実体〉と同一ではあり得ない。ナーゲシャは次のように述べる。

「kāraka [である〈実体〉] は、〈行為〉ではない。[もしkārakaである〈実体〉が〈行為〉と異ならないとするなら] その [〈行為〉] のkāraka [である〈実体〉] との非結合 (ananvaya) が結果するから。なぜなら、kāraka [である〈実体〉] は [直接的には] 相互に関係し得ないからである。」<sup>114)</sup>

このように〈行為〉は、kāraka である〈実体〉と異ならないものではあり得ない。したがって〈行為〉を指差し「こういったものが〈行為〉である」というように現示しえず、ただ同義語を列挙したこの答論者に対する嘲笑は、「君のこの答え方に表れているように、知覚によっては〈行為〉の〈実体〉との差異は確立されないものであり、君は〈行為〉がまさしく知覚によっては〈実体〉とは異なるものとしては認識されないということを追認しているだけである」ということを意図していることになる<sup>115)</sup>。

#### 1.4.1.3.1. [BHĀṢYA]<sup>116)</sup>

[答え] 〈行為〉と呼ばれるもの、それは絶対的に知覚されない (kriyā nāmeyam atyantāparidrṣṭā)。〈行為〉は集結態化したものである (piṇḍibhūta)

から、現示することはできない (aśakyā kriyā piṇḍībhūta nidaṛśayitum)。例えば、分娩された胎児のように (yathā garbho nirluṭhitah)。そのここに問題となっている [〈行為〉と呼ばれる] ものは推理によって理解される (sāsav anumānagamyā)。

### [PRADĪPA]

「[現示することは] できない」：定動詞形 (akhyātapada) によって表示さるべき、その諸部分が連続態をなしている (pūrvāparībhūtāvayavā)、実現に向かった状態にある (sādhyamānavasthā)、多数の部分—過去・未来に属する非有なる部分・現在に属する有なる部分—からなる集合という形態の (bhūtabhaviṣyadvartamānasadasadanekāvayavasamūharūpā) [〈行為〉は]、有なるもの [だけ] を対象とする感覚器官によって把捉されうるもの (sadvastuviṣayendriyagrāhyā) ではない、という意味である。

「集結態化したものである (piṇḍībhūta) から」：例えば、究極の諸原子 (paramāṇu) の場合は集結態化した時には知覚され、単独ででは知覚されないが、これとは反対に、集結態化が〈行為〉が知覚されないということの理由である、という意味である。

「いまだ分娩されていない胎児 (garbho 'nirluṭhitah)」<sup>117)</sup>：例えば、子宮内にいる胎児が知覚されないのと同じように、〈行為〉は [知覚されない]、という意味である。

あるいはまた [garbhaḥ nirluṭhitah] の実現形と解すれば]、子宮から分娩された (nirluṭhita)、すなわち、子宮の外に出た (nirgata) 胎児が知覚されるのと同じようには、〈行為〉は [知覚されない]、というように [これは] 対比的な喩例 (vaidharmyeṇa dṛṣṭāntah) である。

「そのここに問題となっている [〈行為〉と呼ばれる] ものは」：先に述べたここに問題となっている [〈行為〉と呼ばれるもの] は、推理によって認識される、という意味である。

## ノート (15)

この Bhāṣya において、〈行為〉の不知覚性とその根拠が述べられている。パタンジャリによれば、〈行為〉の集結態としての存在様態 (piṇḍībhāva) が〈行為〉の不知覚性に対する根拠である。

例えば我々が「料理行為」と呼ぶところのもの、それは、〈[鍋を火の] 上に置くこと〉 (adhiśrayaṇa) とした部分的諸〈行為〉 (avayavakriyā) の集合 (samūha) である。

「[すべての部分的〈行為〉に] 共通する [集合の形態をとった] 〈行為〉は単一であるとしても、[その] 部分的〈行為〉は多数である。[例えば料理行為には、] [鍋を火の] 上に置くこと・[鍋に] 水を注ぐこと (udakāsecana) ・米を [鍋に] 入れること (tanḍulāvapana) ・燃料を補うこと (edhopakarṣaṇa) [といった部分的〈行為〉がある。]」<sup>118)</sup>

これらの〈[鍋を火の] 上に置くこと〉といった部分的諸〈行為〉は、米の軟化 (viklitti) とした結果の実現に向けて継起的に (kramaṇa, paurvāparyeṇa) 生起する。そしてそれらは、単一共通の結果実現に資するという点で同質なものとして捉えられると同時に集合を構成するものとしてひとつに括られる。

「[順序に従って生ずる [諸〈ハタラキ〉] の集合に対して従属するものである諸部分を具え、[それらの諸〈ハタラキ〉が実現を目指している結果の単一性に基づき、統合作用をなす] 知によって単一性が仮構された集合が〈行為〉と呼ばれる。]」<sup>119)</sup>

さらにこの集合としての〈行為〉は、パーニニ文法学派にとって、定動詞形 (厳密にはその基体である動詞語根) が能成者により〈実現さるべきもの〉 (sādhyā) として表示するところのものである。

「[例えば『彼は料理した』] (|apakṣiti|) という表現が成立する場合のように] 実現されたもの (siddha) であろうと [『彼は料理するであろう』] (|pakṣyati|) という表現が成立する場合のように] いまだ実現されていない

いもの (asiddha) であろうと、およそ実現さるべきものとして表示されるものはすべて〈行為〉と呼ばれる。なぜなら、[〈行為〉とは] 順序の相 (kramarūpa) を帯びるものだから。<sup>120)</sup>

〈行為〉が能成者によって実現さるべき状態にあるということは、集合的な〈行為〉を構成する部分的〈行為〉が、結果実現に至るまで、時間的な流れに沿って次々と能成者によって実現されていく連続的な実現過程にあるということにほかならない。

そしてこのような連続的な実現過程にある部分的〈行為〉の集合という〈行為〉の在り方は、〈行為〉が知覚不能であるということを導かざるを得ない。

「順々に有となつては非有となる (sadasat) それら集合を形成する [複数の部分的〈行為〉] そのものは、[同時に] 有なるもの (sat) [だけ] を対象とする視覚器官などとの関係を結ぶことはない。<sup>121)</sup>

ところで、部分分割の局限にある原子的〈行為〉 (paramāṇuprakhyaḥvaya) に関して、それを「行為」と呼ぶことはできない。なぜなら、動詞語根の表示対象としての〈行為〉は、連続態をなしている部分的〈行為〉の集合を本質とするものであるからである。それを「行為」とみなすことは、それに対する集合の相の仮構 (samūharūpāropana)、集合を構成する部分的〈行為〉の連続的生起の相の仮構 (kramarūpādhyāsa) を俟ってはじめて可能となる。

「[部分分割の終局にある部分に『行為』という語が適用される] その時には、単一であってもその [終局にある部分] は、前後の部分を通じての〈非有の仮構〉に基づいて、順序が確立され、定動詞形により、[〈行為〉として] 表示される。<sup>123)</sup>

「[部分に依拠する] 順序の相が仮構されない限り、順序の放棄された [〈ハタラキ〉] は、定動詞形によって表示され得ない」<sup>123)</sup>のである。

#### 1.4.1.3.2. [BHĀṢYA]

[質問] それはどのような推理か (ko 'sāv anumānah)。

## [PRADĪPA]

「それはどのような」： [P3.3.115 lyuṭ ca 「中性形で〈行為〉(bhāva)が表示さるべきとき (napuṃsake bhāve ←114)、「dhātu」の後に (←3.1.2; 91)「kṛt」接辞 (←3.1.93; 1) Lyuṭが導入される」に基づき] 〈行為〉(bhāva)を意味する [「kṛt」接辞] Lyuṭ (→ana: P7.1.1) で終わる項目は中性形である。しかし、[「kṛt」接辞 Lyuṭ が] それ以外のものを意味する場合には、[その接辞で終わる項目は]、表示対象の影響を受けてその性が特定されない。

[別解釈] あるいはまた [当該男性形の] 〈anumāna〉という語形は、anu + √manA の後に [P3.3.18 bhāve「〈行為〉(bhāva)が表示さるべきとき、「dhātu」の後に (←3.1.2; 91)「kṛt」接辞 (←3.1.93; 1) GHaÑ (←16) が導入される」に基づき「kṛt」接辞] GHaÑ が導入された場合の語形である。

## ノート (16)

カイヤタは、Bhāṣyaに {anumānaḥ} というように男性形で言及されている〈anumāna〉について、その語形解釈を行っている。問題点は、通常この語は中性形として言及されるということにある。第1解釈は、anu + √māÑ + Lyuṭの分析に立脚し、Lyuṭ接辞の意味をP3.3.117 karaṇādhikaraṇayoḥ ca, P3.3.113 krtyalyuṭo bahulamに提示される意味にとろうとするものである。ナーゲージャによれば、当該のLyuṭ接辞はP3.3.117に基づき〈手段〉(karaṇa)を意味する<sup>124)</sup>。この場合〈anumāna〉は、「推理手段」すなわち「推理因(証因)」(hetu)を指示するものと考えられよう。実際ナーゲージャは、当該Bhāṣyaの質問を「推理根拠である証相に関する質問」(anumāpakaliṅgapraśna)と解している。なお彼はカイヤタの第2解釈を行きすぎた解釈として評価しない<sup>125)</sup>。

## 1.4.1.3.3. [BHĀṢYA]

[答え] [(A)] いまここに能成者<sup>126)</sup>がすべて現存しているとしよう。このような条件下で、ある場合には「彼は料理している」({pacati})という

このような【言語運用が】起こり、またある場合には【このような言語運用は】起こらない (iha sarveṣu sādhanēṣu saṃnihiteṣu kadācit pacatity etad bhavati, kadācin na bhavati)。

[(B)] あるものxが現存しているときに「彼は料理している」というこのような【言語運用が】能成者に関して起こる。【一方、そのものxが現存していないとき、このような言語運用が能成者に関して起こらない。このような場合、】そのxが多分に〈行為〉である (yasmin sādhanē saṃnihite pacatity etad bhavati sā nūnaṃ kriyā)。

[(C)] あるいはむしろ、あるものxに基づいてデーヴァダッタがここにいた後パータリプトラにいたとするなら、そのxが多分に〈行為〉である (athavā yayā devadatta iha bhūtvā pāṭaliputre bhavati sā nūnaṃ kriyā)。

#### [PRADĪPA]

「あるものxが現存しているときに」(yasmin saṃnihite)<sup>127)</sup> : ある事象 (vastu) xが現存しているとき、「彼は料理している」とこのように言語運用され、【その事象xが現存してい】ないとき、【このような言語運用は】ないという場合、その事象xが〈行為〉である。

しかし【このBhāṣyaの当該箇所は、】{yasmin sādhanē saṃnihite} というように読まれる場合がある。この場合には次のような意味となる。

あるものxが現存しているときに、「彼は料理している」というこのような【言語運用が】能成者に関して (sādhanaṣaye)<sup>128)</sup> 起こる。【一方、そのものxが現存していないとき、このような言語運用が能成者に関して起こらない。このような場合、そのxが〈行為〉である。】

【反論】次のように考えられよう。蜃気楼を対象としてそれを水と判断する知識のように、「彼は料理している」というこの知識は、まさに非実在 (asatya) を対象としている。

【答え】このような疑念に対して、【パタンジャリは】「あるいはむしろ」というように述べている。

別地点への到達 (deśāntaraprāpti) という特徴を有する、「彼は料理している」といった知識とは違って] 否定され [る可能性の] ない (abādhita) 結果に基づいて、〈行為〉と呼ばれる原因が推理される、という意味である。

[反論] [〈行為〉に対して] 知覚が機能しない場合には [〈行為〉とその結果の間の因果] 関係は把握されないから、どうして〈行為〉を対象として推理が機能し得よう。

[答え] このような誤謬はない。動詞語根の表示対象である [部分的〈行為〉の] 集合は、[その構成部分が] 同時に現存するものではないから (yugapadasamnidhānāt)、知覚されない<sup>129)</sup>。しかし、これに対して、それぞれの [集合の構成部分である、〈鍋を火の] 上に置くこと) などの] 刹那 [的〈行為〉] は知覚される。このような場合、知によってそれら [の刹那的〈行為〉]<sup>130)</sup>を統合した上で (saṃkalayya)、「彼は料理している」というように言語運用される<sup>131)</sup>。

たとえ [集合の構成部分である] 刹那 [的〈行為〉] のひとつに対して「彼は料理している」という言語運用があるとしても、その時にはそれに対して集合の仮構がある。言語の表示能力の本性上 (śabdaśaktisvabhāvāt) 単一の刹那 [的〈行為〉] は、[集合が仮構されない限り] 動詞語根によっては決して表示され得ない。

### ノート (17)

ヘーラーラージャは、Bhāṣya (A) に関して、この言明は〈行為〉の〈実体〉からの差異 (anyatva) を立証しているものであると説明している。

「[Bhāṣya (A) 中に述べられた言語運用の] anvaya (存在) と vyatireka (非存在) に基づき、「彼は料理している」といったことばによって表示される〈行為〉は、〈行為〉を実現せしめる能力を具えた〈実体〉とは異なる。

すなわち、[諸能成者が] 不活動の状態 (audāsīnyāvasthā) では、たとえ諸能成者が存在していても、「彼は料理している」といった知 (prakhyā) と言葉 (upākhyā) は生起しないから、そのような [知と言葉] は、[能成者

とは] 別のものを対象としている。例えば、瓶が現存していても、現在生じていない熱生 (pakaja) [である色など] が、火との〈結合〉を期待するように。… [この Bhāṣya (A)によっては、起こる場合と起こらない場合がある『彼は料理している』といった] 偶発的な特定の知 (prakhyāviśeṣa) が、〈行為〉の [(*実体*)との] 差異に対する証因として述べられている。』<sup>132)</sup>

ナーゲーシャは、この〈行為〉の〈実体〉からの差異を対象とした推理を次のように定式化している。

「[主張] 目下の主題は、諸 *kāraka* と区別される。[証因] [それに対する] 否定者がいないという条件下で、諸 *kāraka* が存在する時、表現の対象とならないから。[必然性] [それに対する] 否定者がいないという条件下で、*x* が [存在する] 時に表現の対象とならない *y* は、*x* と区別される。』<sup>133)</sup>

こうして当該 Bhāṣya(A)は、Bhāṣya[シノプシス]1.4.1.1-1.4.1.2.2に議論された〈行為〉と〈実体〉の差異を明らかにする認識根拠をめぐる問題に、能成者である〈実体〉がそろった環境下での行為表現の在り方を根拠とした推理を提示することによって回答を与えるという役割を担っていることになるのである。

Bhāṣya(B)(C)は、これに対して、〈行為〉そのものが推理によって知られるという場合のその推理の有り様に対する回答となっている。このうち Bhāṣya(B)は、カイヤタが記述するところの「あるもの *x*」と「彼は料理している」といった行為表現の間の肯定的共在関係 (*anvaya*) と否定的共在関係 (*vyatireka*) の在り方が示すように、意味と言語運用 (*śabdaprayoga*) との間に因果関係を想定し、「彼は料理している」といった行為表現の原因とみなされるもの (*x*) が〈行為〉と考えられる、とするものである。ところで、パタンジャリは、言語使用者の立場から意味とことばの関係を、「ことばはまさに意味を根拠とする」(*arthanimittaka eva śabdah*) というように表現している。カイヤタはこれを次のように解説している。

「まさに意味こそが言語運用を促すものである。それ [=意味] を理解せしめるために言語の運用がある。そして、[言語の] 運用がないことから、[次

のように] 推理される。多分にまさに意味はここに [言語運用を] 促すものとして存在しない。もしあれば言語運用を促したはずである。<sup>134)</sup>

ナーゲーシャは、カイヤタが提示するこの推理を、河の増水がないことから河の上流において降雨がないことが推理されるのと同様の結果の非存在 (kāryabhāva) に基づく原因の非存在 (kāraṇabhāva) の推理であると説明している<sup>135)</sup>。これより、上記言明 [arthanimitaka eva śabdah] が意図するところは、意味は言語運用に対して原因であり、言語運用は意味に対して結果である、ということであることは明らかである。したがって Bhāṣya(B)に従えば、「彼は料理している」といった行為表現があるとき、結果であるこの表現に基づいて原因である〈行為〉という意味が推理される、ということになるであろう。

ところで、結果と目される言語運用からはその虚偽なる可能性が排除され得ない。蜃気楼を水と思いなして「水がある」と表現される場合があるであろう。「彼は料理している」という行為表現の対象もこれと同じように非實在 (asatya) で有り得るのである。原因である〈行為〉という意味が現実に存在しなくても、そのような行為表現は成立し得るからである。

ここに〈行為〉の推理に関して Bhāṣya(C)が提起される理由がある<sup>136)</sup>。すなわち、結果と目される言語運用には否定 (bādhita) の可能性があるのに対して、別地点への到達という結果には、それはない。この点についてヘーラーラージャは次のように述べている。

「すなわち、到達 (prāpti) という特徴を有する結果は、〈実体〉だけからは生じないから、その [〈実体〉] とは異なるものとして、[〈実体〉とは] 別異なものである〈ハタラキ〉を知らしめる。なぜなら、[このような形の〈ハタラキ〉の認識が] 誤謬知であるとすれば、対象は存在しないから、結果の不生起が帰謬するはずであるから (phalānutpattiprasaṅgāt)。<sup>137)</sup>

それではどのような形で推理が成立するのであろうか。まずヘーラーラージャは次のように述べている。

「そして、能力を本質とする能成者だけからは結果は生起しない。たとえ [そ

の能成者が] 能力を有するものであるとしても、(ハタラキ) がない場合には、結果は観察されないから。したがって、特定の順序に依存して結果を実現せしめるような何かあるものが存在する。」<sup>138)</sup>

さらに、ナーゲーシャは次のように定式化している。

「[主張] 〈結合〉から生ずるものと異なる〈結合〉は、〈行為〉の所産である。

[証因] *kāraka* から生ぜず、かつ、所産であるから。」<sup>139)</sup>

ここに示されている両推理は、明らかに(残余法) (*pariśeṣānumāna*) である<sup>140)</sup>。なぜなら、結果実現に参与する要素として(実体) とそれと異なるものとしての〈行為〉を想定し、一方の〈実体〉における結果実現に対する原因性を否定することによって、その原因性を〈行為〉に限定しているという構造が見られるからである。そして、この(残余法)の適用にあたって、(実体) (*kāraka*、能成者) と〈行為〉の差異が前提されることは言うまでもなく、ここに両者の差異を立証する *Bhāṣya* (A) の意義があるとも言えよう。

ところで、この〈行為〉の推理は、推理対象である〈行為〉そのものが不知覚であるということによって、推理の基盤である結果と目される到達との因果関係の把握が確保されないという困難さをもつ。関係把握の可能性をヨーガ行者の言語運用に求めているカイヤタの見解はここでは考慮する必要はないであろう。ナーゲーシャの次の言明に注目したい。

「[主張] 後続地点との〈結合〉といった結果は、原因から生ずる。[証因]

結果であるから。そしてその原因は、周知のものから異なるものである場合、他の[周知のものから異なる]ものが否定されることに基づき、まさに〈行為〉というものにほかならないと確立される。」<sup>141)</sup>

ここでは、推理対象が証相との関係把握時においてさえ知覚されることのない場合に適用機会を有する〈共通性に基づく推理〉 (*sāmānyatodrṣṭa*) によって、〈結合〉といった結果が何等かの原因によるものであることが確立され、次にその原因の特定化として、〈残余法〉が適用されている、と考えることができよう。ヘーラーラージャは、これに対して、〈到達〉は原因を期待する、さもなければ到達という結果は生起しないであろう、というように帰謬法 (*prasaṅga*)

に基づいて、〈到達〉の所産性を確立しているように思われる。とまれ、Bhāṣya(C)は、到達という事象を因果関係の相面で捉え、それに基づいて原因としての〈行為〉が推理される、すなわち、〈行為〉は〈行為〉の結果に基づいて推理される (phalānumeyā kriyā) という事以上は何も語っておらず、その推理が論理学史上、どのようなものとして性格づけられるべきかは、「行為推理論」(kriyānumānavāda) とともになおまた検討を要する課題である<sup>142)</sup>。

#### 追加参考文献略号

- 小川英世 [1990]「行為と言語 サンسكريット意味論研究：動詞語根の意味」  
『広島大学文学部紀要』第49巻特輯号3  
[1993]「Mahābhāṣya ad P1.3.1研究 (4)」『広島大学文学部紀要』  
第53巻
- 狩野 恭 [1987]「主宰神の存在論証と kevalavyatirekīhetu」『インド思想史  
研究』5
- NM *Nyāyamañjarī of Jayantabhaṭṭa*. Vol.1. Ed. Vidvan, K. S. Varadacharya.  
Mysore: Oriental Research Institute, 1969.
- VP *Vākyapadīya of Bhartṛhari with the Prakīrṇaprakāśa of Helārāja, kāṇḍaIII*,  
part ii. Ed. K.A.Subramania Iyer. Poona: Deccan College, 1973.
- VSLM *Vaiyākaraṇasiddhāntalaghumañjūṣā of Nāgeśa Bhaṭṭa*. Ed. Bhāṇḍāri,  
Mādhava Śāstrī. CSS 44. Varanasi: Chowkhamba, 1913-26.
- VSM *Vaiyākaraṇasiddhāntamañjūṣā of Nāgeśa Bhaṭṭa*. Ed. Kapil Dev Shastri.  
Kurukshetra: Vishal Publications, 1985.

#### 注

- 102) Uddyota: asambhāvayata iti. apratyakṣatvād iti bhāvaḥ.  
103) 小川[1993]、ノート (10) を見よ。  
104) Uddyota: evaṃ ca prakṛtalakṣaṇenāpi dravyavācīnām dhātutvānivr̥tṭeh samānaśa-  
bdātiprasaṅgas tadavastha iti bhāvaḥ.

- 105) Uddyota: śabdānuśāsanapravṛttānām arthavivecane kā prasaktiḥ.
- 106) 小川[1990: 95-97]。
- 107) Mbh ad P3.1.67: dravyaṃ kriyayā samavāyaṃ gacchati. kaṃ samavāyaṃ [gacchati].  
dravyaṃ kriyābhinirvṛttau sādhanatvam upaiti.
- 108) Mbh on vt.7 ad P1.3.1: kriyā caiva hi bhāvyaṭe svabhāvasiddhaṃ tu dravyam.
- 109) Uddyota on Mbh ad P3.1.67: kriyānirūpitakarmādisamjñāsamānādhikarāṇaśaktibhiḥ sambandhaṃ gacchati...kāraśaktimattvam ity arthaḥ. kāraśa は、〈行為〉に対する実現関係の aspekto から能成者 (sādhana) と呼ばれ、〈行為〉実現の能力 (śakti, sāmārthya) であると同時にそのような能力の基体でもある。Cf. 小川[1990: 40-46]。
- 110) 因みに、パーニニ文法家にとって 〈kriyā〉 〈vyāpāra〉 〈bhāvanā〉 〈utpādanā〉 はすべて同義語である。Cf. 小川[1990: 19]。
- 111) Uddyota: śabdair eva śabdān vyākaroti bhāṣyākṣarārthaḥ.
- 112) Uddyota: kriyāpadārthapraśne idam yuktaṃ, na tu kriyāpadārtho nātirikto dravyād iti praśne. tatra hi dravyavyatireka eva sādhanīya ity upahāsa iti bhāvaḥ.
- 113) Uddyota: svarūpaṃ dravyavyatirekaḥ.
- 114) Uddyota: kāraśaṃ na kriyā tasyā kārakānanvayāpatteḥ, kārakānām mithaḥ sambandhāyogyatvāt. kāraśa 間の関係は、〈行為〉を媒介とした間接的なものである。Cf. VSM119: tatra kartrā karmaṇaḥ sāksāt sambandhasya asambhavāt kriyādvārakaḥ paramparāsambandho gṛhyate.
- 115) Uddyota: tasmād \*avyatiriktakriyāsiddheḥ sarvathety upahāsaḥ kārakātiriktakriyā pratyakṣeṇa nopalabhyata ity evam paro vācyāḥ. \*Nirṇayasāgar 版: vyatiriktakriyāsiddheḥ. この読みに従えば「〔〈実体〉と〕別個なものとして〈行為〉が確立されるから」ということになる。しかし、〈行為〉と〈実体〉の差異が立証されるべきであったにもかかわらず、当該の返答によっては、それがなされていないという意味で嘲笑を招いたのである。
- 116) この Bhāṣya の言明は、P3.2.102, 115に対する Bhāṣya 中にもほぼ同じ形で見いだされる。Cf. Mbh ad P3.2.102, 115: kriyā nāmeyam atyantāparidrṣṭānumānagamyaśakyā piṇḍībhūtā nidarśayitum yathā garbho nirluṭhitaḥ. Bhāṣya 中の {atyantāparidrṣṭā} の部分に関して、カイヤタ [Pradīpa on Mbh ad P3.2.102] は、それを {atyantāparadrṣṭā} というように読んでおり、「[推理に相対して] 主要な (para = pradhāna) 認識根拠である知覚、[それによっては絶対的に認識されない]」というように解釈している (atyantāparadrṣṭeti. paraṃ pradhānaṃ pramānaṃ pratyakṣam. anumānasya tatpūrvakatvāt)。ナーゲルシャ [Uddyota on Mbh ad P1.3.1] もこの読みに従っている (atyantāparadrṣṭeti. pareṇa pramāṇeṇa pratyakṣeṇātyantam,

avayavaśaḥ samūharūpeṇa vādṛṣṭety arthaḥ)。なお、彼は不知覚の絶対性（「絶対的に [知覚されない]」) (atyanta) を、「部分ごとにも、集合としても知覚されない」というように説明している。

- 117) Bhāṣya 中の [garbhonirluṭhitaḥ] という接続形を [garbhāḥ nirluṭhitaḥ] [garbhāḥ anirluṭhitaḥ] のいずれの実現形と取るかによって解釈が分かれる。カイヤタの提示する第1解釈は、後者に基づき、第2解釈は前者に基づく。
- 118) Mbh ad P3.1.22: yady apy ekā sāmānyakriyā, avayavakriyās tu bahvyaḥ. adhiśrayaṇodakāsecanatanāṇḍulāvapanaidhopakarṣanakriyāḥ.
- 119) VP III , kriyā, k.4: guṇabhūtair avayavaiḥ samūhaḥ kramajanmanām / buddhyaḥ prakalpitābhedāḥ kriyety vyapadiśyate // Cf. 小川[1990: 28-31].
- 120) VP III , kriyā, k.1: yāvat siddham asiddham vā sādhyatvenābhidhiyate / āśritakramarūpatvāt tat kriyety abhidhiyate // Cf. 小川[1990: 14-16;19-21].
- 121) VP III , kriyā, k.6: kramāt sadasatām teṣāṃ ātmāno na samūhinām / sadvastuviṣayair yānti sambandham cakṣurādibhiḥ //
- 122) VP III , kriyā,k.11: pūrvottarais tathā bhāgaiḥ samavasthāpitakramaḥ / ekaḥ so 'py asadadhyāsād ākhyātair abhidhiyate //
- 123) Helārāja on VP III , kriyā,k.10: kramarūpānadyāse tu pratyastakramo nākhyātābhidheyāḥ. Cf. Pradīpa[1.4.1.3.3].
- 124) Uddyota: tathā ca karaṇe lyuḍ iti bhavaḥ.
- 125) Uddyota: athaveti. prauḍhyā.
- 126) この場合「能成者」(sādhana) が、〈行為〉実現に対する能力そのものではなく、そのような能力の基体としての〈実体〉(Pradīpa on Mbh ad P3.2.115: śaktivyatirik-taṃ śaktimaddravyam) を指すことは言うまでもない。なぜなら、能力もまた推理によって知られるものであるからである(Pradīpa on Mbh ad P3.2.115: śaktinām nityānumeyatvāt)。Cf. Mbh ad P3.2.115: yadi tāvatd guṇasamudāyaḥ sādhanam, sādhanam apy anumānagamyam. athānyad guṇebhyaḥ sādhanam, bhavati pratyakṣaparokṣatāyām sambhavaḥ.
- 127) Nirṇayasāgar 版—Bhāṣya: yasmin sannihite.
- 128) Vedavṛata: sādhanaviśayo. Nirṇayasāgar: sādhanaviśaye に従う。定動詞形 [pacatiḥ] の定動詞接辞ti(P)は、〈行為主体〉という能成者を表示する (P3.4.69)。デーヴァダッタという〈行為主体〉に関して、彼が料理行為をなしているとき、「彼は料理している」という表現が成立し、一方、彼がそのような行為の担い手とはみなされない場合には、その表現は成立しない。いずれの読みでも〈行為〉の存在・非在と行為表現の成立・不成立が対応する点では同じである。

- 129) Cf. Pradīpa on Mbh ad P3.2.102: tena[ = pratyakṣeṇa] kriyā na dṛṣyate. avayavasamūhasya yugapadanutpādād anavasthānāc ca.
- 130) Uddyota: ekaikasyeti. adhiśrayaṇāder ity arthaḥ.
- 131) Pradīpa: ... pratyakṣatve 'py ekaikakṣaṇasya tu kṣaṇasya pratyakṣatve... Uddyota: pratyakṣatveneti. Cf. VSLM 863: yad api bhūvādisūtre kaiyaṭena samūhasyāpratyakṣatve 'pi ekaikasya kṣaṇasya pratyakṣatvena buddhyā tān kṣaṇān saṅkalayya pacatiti prayujyate iti / tad api... ナーゲーシャによれば、ヨーガ行者だけが刹那的な部分的<行為>を知覚できる。彼らは、時間的に継起してくる刹那的諸<行為>を知覚し、それらを一時に想起してそれらの統合態を把握する (saṅkalanā)。そしてこうして把握された統合態に対して結果との関係を把握するのである。Cf. Uddyota: idaṃ ca yogiprayogaviṣayam, teṣāṃ evāvayavakriyāpratyakṣāt. VSLM863: yogināṃ kramenānubhavaviṣayāṇāṃ api ekabuddhau saṅkalanā bhavaty eva. anubhavapūrvakaṃ hi smaraṇam na tu kramopalabdham yugapan na smaryate iti.
- 132) Helārāja on VP III, kriyā, k.1: ... anvayavyatirekābhyāṃ pacatyādisabdavācyā kriyā dravyāt kāraśaktiyuktād anyā. tathā hi — audāsīnyāvasthāyāṃ satsv api sādhanesu pacatītyādiprakhyopākhyayor abhāvād arthāntaraviṣayatvaṃ tayoh. tad yathā ghaṭasannidhāne 'utpadyamānānām pākajānām agnisamyogāpekṣitvam... kādācitkaḥ prakhyāviśeṣo hetuḥ kriyāyā vyatireke 'bhihitaḥ.
- 133) Uddyota: vimataṃ kārakebhyo bhidyate, bādhakābhāve kāraśattakāle 'vyavahriyamānatvāt, bādhakābhāve yad yatkāle na vyavahriyate tat tato bhidyate iti prayogaḥ. この論証式において証因に「[それに対する] 否定者がいないという条件下で」(bādhakābhāve) という限定が与えられるのは、言語表現の対象 (vyavahāraṇaviṣaya) が否定されるものとして表現されないということになれば、その対象は非実在なものとしてそれについて他者からの差異を問題とすることができないからである。この限定は Bhāṣya (C) 提起の理由に関っている。
- 134) Pradīpa on Mbh ad P1.1.46: artha eva śabdasya prayojakas tatpratipādanāya śabdaprayogaḥ. aprayogāc cānumiyate — nūnaṃ artha evātra prayojako nāsti śabdaprayogaṃ yaḥ prayuñjīta.
- 135) Uddyota: kāryābhāvena kāraṇābhāvo 'numiyate. yathā nadīpūrābhāvenoparīdeṣe vṛṣṭyabhāva iti bhāvaḥ.
- 136) ヘーラーラーージャも、カイヤタと同じ様に、Bhāṣya (C) 提起の理由を、行為表現の対象の非実在性の可能性に求めている。Helārāja on VP III, kriyā, k.1: sa[prakhyāviśeṣaḥ] tu asaty api viṣaye marcikājālavāsāyavat syād itīdam aparam atra liṅgam upanyastam.

- 137) Helārāja on VP III, kriyā, k.1: tathā hi prāptilakṣaṇaṃ phalaṃ dravyamātrād abhavad vyāpārāntaraṃ tato 'nyad āvedayate. mithyāpratyaeye viśayasyābhāvāt phalānutpattiprasaṅgāt.
- 138) Helārāja on VP III, kriyā, k.1: na ca sādhanād eva śaktyātmanaḥ phalopajānaḥ. śaktatve 'pi vyāpārābhāve phalādarśanād ity asti kaścit so 'rthaḥ yaḥ kramaviśeṣāpekṣaḥ kāryam abhinirvartayati.
- 139) Uddyota: saṃyogajabhinnāḥ saṃyogaḥ kriyājanyaḥ, kārakājanyatve sati janyatvād iti prayogaḥ. x の y 地点への到達は、x の y 地点との＜結合＞である。
- 140) 狩野[1987:13]によれば、「AはBである。B以外のものが否定されていて、Cであるから」というように＜残余法＞は定式化できる。
- 141) Uddyota: uttaradeśasaṃyogādiphalaṃ kāraṇajanyaṃ, kāryatvād iti / tac ca kāraṇaṃ prasiddhātireke itarabādhabalāt kriyārūpam eva prasiddhyati.
- 142) ジャヤンタ [NM351-2] が他学派(グル派)の説として紹介する「行為推理論」は、文法学派のそれと極めて類似したものであるが、そこでは、＜行為＞の推理は＜共通性に基づく推理＞とみなされている。  
(未完)

## A STUDY OF THE MAHĀBHĀṢYA AD P1.3.1 (5)

Hideyo OGAWA

### SYNOPSIS (5)

1.4.1.1. [Question] The question is asked: What is an action? Behind this question lies an idea that an action (*kriyā*) is not perceived as a separate entity from a substance (*dravya*).

1.4.1.2.1. [Answer] The answer is given by means of enumerating some synonymous terms for 'kriyā.'

1.4.1.2.2. [Objection] This manner of answering confirms that an action cannot be perceived directly.

1.4.1.3.1. [Answer to the objection] An action is absolutely not visible since it is the mentally constructed complex, the constituent action-moments of which occur in sequence, no sooner arising than they pass. It can only be known through inference (*anumānagamyā*).

1.4.1.3.2. [Question] The question is raised: What inference is it that one might resort to to know an action?

1.4.1.3.3. [Answer] i) Inference of the difference of an action from a substance (*dravyavyatireka*): On condition that all participants in an action (*sādhana*-s) are present, sometimes one rightly says *pacati* ('he is cooking'), and sometimes one does not have this. One reasons as follows: The speech unit *pacati* has for its referent a different entity from the participants. What is referred to by *pacati*, that is, an action, is different from a substance.

An item referring to a substance cannot be called *dhātu* owing to the distinction between an action and a substance. In this respect, what is ascertained by this inference is of significance for the definitional rule for the term *dhātu*: *kriyāvacaṇo dhātuḥ*.

ii.a) Inference of an action from the use of the verb form like *pacati* (*śabdaprayoga*): That, as a consequence of whose being one rightly says *pacati*, is an

action.

ii.b) Inference of an action from a spatial movement (*deśāntaraprāpti*): That, on account of which someone like Devadatta is first in one place and then in another place, is an action.

According to Patañjali, an action has the cause-effect relation to the use of the verb form and to movement, which enables one to infer an action from these. With him, actions are inferred from their results.

Of these two types of inference, Patañjali considers the latter to be preferable, for the reason that the use of the verb form *pacati* may take place even when what is supposed to be its cause, that is, an action of cooking, is not present in reality. One may say that a result such as reaching another place does not occur without its cause being present.

(To be continued.)